のために出張した際、ルムショッテルは当局への紹介、資料蒐集はもとより、日本の国情に合うように自分の意見を添えて周到な助言を行った。また、野村の次に、明治34年に彼を訪ねた鉄道技師那波光雄（1869-1960）は、次のように回想している。

「ルムショッテル氏はその頃官をやめてベルリン機械工業会社の重役をされていた。アパートで簡素な生活をされていたが、部屋には鎧やカブト、太刀などを飾り、壁には錦絵の額がかけてあった。書棚にはぎっしり専門の本が並んでいた。60代半ばとは見えぬ若々しい風貌で、私はベルリン滞在中公私共に非常にお世話になったが、よく気のつく人であった。研究の面で参考になりそうなことがあるとすぐ知らせてくれ、関係箇所への連絡までこまかに指示して下さった。先生は特に、橋梁や高架鉄道に深い造詣を持っておられたので、自分にとって啓発されることが多かった。その時はまだ独身でおられたがまもなく結婚されたと聞いている」（山中忠雄『ルムショッテル記』）。

ルムショッテルは1903年（明治36）枢密建設顧問官（Geh. Baurat）に任命された。この栄誉は日本の鉄道関係者に喜びを以て受け止められた。そして1905年（明治38）５月には日本国鉄資材購入の顧問となり、我が国の鉄道に貢献するところ大であった。しかし、第一次世界大戦の勃発のために1914年（大正３）この顧問の役目は解消になった。なお、国鉄関係者で最後にルムショッテルに会ったのは、明治43年にドイツに出張した工作課長の島安次郎（1870-1946）と技師の朝倉希一（1883-1878）あたりであったろう。OAG 会員名簿（1914）によると、彼はベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム街21番地に住んでいた。

ルムショッテルは第一次大戦の末期、国情騒然たる中、1918年（大正７）９月22日、74才で世を去った。

ルムショッテルは、「九州鉄道建設の恩人」と呼ばれ、鉄道88周年の1960年（昭和35）に彼のレリーフが制作された。それは現博多駅のコンコースの柱に飾られている。だが、彼はひとり九州鉄道だけでなく、我が国鉄道全体にとっても恩人である。特に、日本人技師の指導・養成に尽くした功績は特筆すべきものがあった。

彼は、鉄道関係のお雇い外国人第１号のモレルと並んで功績のあった人だが、その割には知られることが少ない。現在、日本の鉄道技術は世界のトップクラスにあるが、その基礎は明治のお雇い外国人に負うところが大きいことを忘れてはなるまい。ルムショッテルについても今後、本格的な研究書なり伝記が書かれてしかるべきだろう。

外交官・吉田作彌

明治初期の熊本には三人の傑物三兄弟がいた。吉田泰造、吉田義静、吉田作彌である。三人を育成した父・吉田如雪は吉田家第14代に当たり、晩年、肥後藩主の令息細川建千代（のちの細川第15代藩主護成）の教育掛になった人である。長兄の泰造は、明治５年実学党の人とともに新学制により春日小学校を創設し、33才でその校長となり、近代教育を始めた。次いで熊本師範学校舎監となり独自の新教育法を行うなど熊本近代教育の祖師であった。上熊本駅に近い

吉田作彌

京町台の往生院にある顕彰碑にも「熊本近代教育之功労者」の文字が冠せられている。弟義静はフランスに約10年滞在し、明治の第一級の仏学者として日本政府の教育勅語の仏訳を完成し、最後は山梨師範学校長を勤めた。そして三男作彌は外交官で、独逸学者でもあった。

吉田作彌は安政6年（1859）5月13日、肥後国・赤尾丸城趾（京町台）に生まれた。はじめ明治4年に熊本洋学校に入学、米国人ジェーンズから英語と普通学を学んだ。明治9年6月同校卒業。次いで洋学校入学時以来の友人である浮田和民とともに京都同志社英学校に入学した。これより先、二人は決心してキリスト教を奉ずることになった。父や兄弟たちはそれには反対したが、作彌は自分の信念を貫いた。明治12年夏、同校特別科卒業後、履歴書（外務大臣官房人事課蔵）によると「爾来十六年に至ルマテ英語ノ書ニ依リ哲学ヲ自修」した。この間一時、大阪で宣教師について古典ギリシャ語を研究した。明治13年神戸英和女学院の教師を勤めた。履歴書にはそのことは全く書かれていない。だが、浮田和民は外交官になる前のこの頃のことを「吉田作彌兄を思ふ」（『創立五十年神戸女学院史』）において次のように語っている。

「（前略）私が君に始めて会見したのは明治四年九月熊本洋学校入学試験の当日であったと思ひます。年齢に於て左程の懸隔はなかったのでありますが、君は漢学の素養に於て遙かに私の先輩でありました。家柄も肥後藩武道指南番で従て武術の達人又た碩学の士を出せる名家でありました。君は事故の為め一年後れて明治九年六月卒業されましたが、私も病気の為め一年後れて同年同月に卒業し、それから明治十八年まで私は君と殆んど苦楽を共にし且つ所在を共にし、窮通相依り相助けられたのであります。

明治九年相携へて京都同志社に入学しましたが是より先き私共旧友は一同決心して基督教を奉ずることになりました。君には慈父あり、長兄あり、次兄ありて、交々君の異端を責め、且つ外間有力者の反対甚だしく君の出処進退頗る困難でありました。

君が一命を賭して其の窮地を脱し盟友と共に出発されたことは如何に私共を激励したか、今に忘れない所であります。同志社在学中も、君は最も勉強家であり、大冊ミルのコジクなども読了されたことを記憶して居ります。明治十二年の秋、君は大阪に出て一時宣教師に就て古典希臘語を研究されましたが、私も同時に大阪にありて、君と常に相往来して居りました。明治十三年君は神戸英和女学校教師となって熱心教育に従事されましたが、翌年私も亦た神戸に赴き君と同宿することになりました。当時君が養成されました女学生の中には、後年社会に出でゝ頭角を顕はし、今日に至るまで猶ほ活動して居らるゝ方があります。（後略）」

だが、やがて人生の転機が訪れた。履歴書によると1884年（明治17）6月20日付で外務省御用係（准判任月俸金40円）を申付けられ、交信局に勤務した。そして翌年4月には在墺国公使館会計主務を申付けられパリ、ベルリンを経て赴任した。1886年（明治19）3月交際官補として外務省に出仕し、ウィーン公使館付となった。この頃碩学ローレンツ・フォン・シュタインに面会し、学問をしたい、と申し入れたが、何の学問をしたいかと聞かれたので、哲学を学びたい言ったら、それには答えず、近世史を読め、東洋の地図を見よ、と言われたというエピソー

ドが残っている。同郷人井上毅の引き立てにより1888年（明治21）ドイツのボン大学に留学することになった。ボン大学公文書館の資料によると、1888年11月17日に入学の登録を行い、89年の8月2日に退学している。年齢29。専攻は法律学。父の職業欄にはサムライ、宗教はキリスト教となっている。最初ベートーヴェン街34番地に住み、のちポッペルスドルファー・アレー96番地に移った。1890年（明治23）3月同大学より法学博士の学位を授与された。帰国後、明治26年文部大臣秘書官に任じられたが、のち一時法科大学講師を勤めたが、同年11月第三高等中学校教授となり法学部主事を命じられた。だが教師は性に合わぬと感じたのか辞め、再び明治31年外交官に戻った。そしてウィーンの日本公使館の第二書記官となった。最後は1908年（明治41）6月特命全権公使に昇任しシャム（タイ）のバンコックに赴任した。明治44年6月には勲三等瑞宝章を授与された。履歴書によると1914年（大正3）6月26日付で依願免本官となり、外交官生活に終止符を打った。そしてその後は悠々自適の生活を送ったようだ。元来彼は思索型の人間で、哲学や宗教に関する論文を雑誌にいろいろ発表しているほかに、『現代政治の社会化及産業化』（大正15年）『他界に在るジャリアの音信』（昭和2年）などの訳書がある。

「独逸学の盛衰」（『紫溟新報』）

『九州日日新聞』（熊本）の前身の『紫溟新報』に1888年（明治21）5月29日から31日まで3回にわたり「独逸学の盛衰」と題する社説が掲載された。著者は恐らく佐々友房であろう。佐々は当時済々黌の黌長で、国権派として知られていた。『紫溟新報』は佐々が明治14年に創設した政治結社「紫溟会」を背景とする国権派の新聞（明治15年8月7日創刊）であった。

最初に著者は、欧米各国は概して文化隆盛の国だが、学術・技芸には精粗優劣の差があることは否定できないとする。

「吾人が窃(ひそか)に聞く所を以てすれば米国の学芸は之を英仏に比するときは精微の点に於て歩を譲る所あり英仏の学問は又之を独逸に望むときは其深遠高尚の点に於て其等を減ずる所あり然らば即ち単に学問の一点をして観察を下し浅近よりして深遠に進み粗簡よりし精緻に進むと云ふ智識進捗の定則に従ひ我邦学問が始めは専ら米国に採り漸く進んで英仏二学となり遂に進んで独逸学となり特に一昨年に至りて独逸学大いに流行せんとしたるものは又た怪しむに足ること無きなり」

だが、欧米各国の学芸には上記のように精粗優劣があると言っても、それはもとより一般論であって詳細に検討すれば一長一短が見つかるに違いない。著者はこう前置きした後、我が国では欧米各国の学芸を批評して、これを取捨する際に、学問の価値によらずその国の政治制度によってする者があるが、これほど間違ったことはないとする。我々が米国を学ぶのは米国の共和制を慕うからではなく、仏学をなすのは仏国の革命を学びたいからではない。また独逸学を勉強するのは独逸風の政治を我が国に移したいからではない。

「左れば其邦の政治社会は如何なるものにせよ只其学問を取るものなれば学問さへ精緻深遠なる所あれば英仏独米我に於て何か有らんや。且つ夫れ我邦にして彼(か)の欧米各国の学問を採る